

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：35308

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21535

研究課題名(和文)多職種連携で生じる意見の対立を解き明かす技術の教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of an educational program on techniques for dissolving conflicts of opinion that arise in multi-disciplinary collaboration

研究代表者

京極 真 (Kyougoku, Makoto)

吉備国際大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：50541611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、多職種連携で生じる意見の対立への対応に必要な知識と技術を学習するための教育プログラムを開発することだった。教育プログラムは信念対立解明アプローチを基盤に設計した。教育内容は(1)意見の対立が生じるメカニズムの理解、(2)ストレスマネジメント、(3)解明的思考法、(4)多様性の尊重、(5)情報共有、(6)目的達成できる方法の選択・実行という枠組みで構成された。また、各回は共通して学習、課題遂行、課題提出、信念対立解明アプローチの専門家からのフィードバックを受ける、という機能を実装した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多職種連携は医療保健福祉において不可欠の方法であるが、意見の対立によって機能がたくなる問題がある。そのため、これまで多職種連携教育が盛んに推進されてきたが、信念対立解明アプローチを基盤にした意見の対立への対応を学習できる教育プログラムは、これまで開発されていなかった。本研究を通して開発された教育プログラムは、意見の対立への対応に必要な知識と技術を学習できるものである。それにより、多職種連携で生じる意見の対立を低減・予防できる人材育成に貢献できる可能性があり、我が国の医療保健福祉の教育の発展に寄与できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop an educational program for learning the knowledge and skills necessary to deal with disagreements that arise in multi-disciplinary collaboration. We designed an educational program based on the Dissolution Approach for Belief-conflict. The educational content included (1) understanding the mechanisms of disagreement, (2) stress management, (3) dissolutive thinking, (4) respect for diversity, (5) information sharing, and (6) tips for achieving objectives. In addition, each session consisted of the following common functions: (1) learning, (2) task performance, (3) task submission, and (4) feedback.

研究分野：教育工学

キーワード：多職種連携 対立 信念対立解明アプローチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代の保健医療福祉において、多職種連携は欠かすことができない中核的方法であるが、多種多様な立場の人々が協働するため意見の対立(信念対立)が問題になることが多い。意見の対立は、患者の死亡率や罹患率の増加、医療者の職業性ストレスや離職率の増大などに影響する問題である。国際労働機関は、医療者の労働衛生が他の労働者に比べて極端に悪いと述べ、理由の1つに立場の違いで生じる意見の対立を挙げている。世界保健機関は、異なる立場のチームメンバーが、意見の対立を越えて建設的にコラボレーションする必要性を強調した。

それを実現するためには、学生時代からの多職種連携教育が重要である。多職種連携教育では、学生がそれぞれの専門性について理解を深めながら、コラボレーションを体験する学習法が盛んに取り組まれている。これは、専門職種間の協働関係を学び、エビデンスに根ざし、クライアント中心の実践を学習するうえで有益な取り組みである。しかし、従来の国内外の取り組みは、意見の対立を克服するためにコミュニケーション、チームワークなどの知識と技術に焦点を当ててきたものの、意見の対立を解き明かす知識と技術に関しては未整備であった。

意見の対立を解き明かす理論に、信念対立解明アプローチがある。これは現象学、構造構成主義を基盤にした哲学的実践論であり、これまで多職種連携で生じる意見の対立の程度を測定する尺度の理論的基盤、保健医療福祉で生じる意見の対立の実態解明、意見の対立によって生じる諸問題の低減に対する有用性などが検討されてきた。したがって、多職種連携の質を高めるためには、多職種連携で生じる意見の対立を解き明かす知識と技術を学べる信念対立解明アプローチを基盤にした教育プログラムの整備が非常に重要となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、多職種連携で生じる意見の対立への対応に必要な知識と技術を学習するための信念対立解明アプローチを基盤にした教育プログラムを開発することだった。

3. 研究の方法

具体的には以下の方法で研究を進めた。

(1) 教育プログラムの内容を整備する

信念対立解明アプローチを基盤にして、意見の対立への対応に必要な知識と技術の教育内容を整備した。意見の対立への対応には、それがいかなるメカニズムで生じるのかを理解することが肝要となる。また、意見の対立によって生じる不安、怒り、抑うつなどのストレスマネジメント概念の理解も欠かせない。さらには、意見の対立を克服するための思考促進概念およびコミュニケーション促進概念の実装も必要である。そこで、国内外の先行研究の精査および信念対立解明アプローチの専門家との討議を重ねながら、上記の課題を満たす教育プログラムの内容を整備していった。

(2) 教育プログラムのパイロット実践を行い、改良する

教育プログラムは、医療系学生を対象にパイロット実践を通して課題を精査し、改善を加えた。その際、学習者の学習体験プロセスに着目し、主体的学びや学習促進等の支援機能を実装した教育プログラムへと拡張していった。また、教育プログラムは試行、運用のプロセスから、実践知の蓄積、洗練、内容の拡充に取り組んだ。

(3) 教育プログラムの有用性を検討し、必要に応じてさらなる改良を行う

改良した教育プログラムは医療系学生を対象に実施し、その有用性について質的、量的に検討を行った。また、その結果を踏まえて、さらなる改良の余地があるならば、教育プログラムのさらなる改善につなげることにした。なお、教育プログラムに反映するための実践知の蓄積、洗練、内容の拡充への試行、運用は継続的に取り組んだ。

4. 研究成果

本研究を通して、図1に示すような基本構造をもつ教育プログラムを開発することができた。これは、信念対立解明アプローチを基盤に、多職種連携で生じる意見の対立を解き明かす知識と技術を学習するためのものである。

教育プログラムの基本構造は全6回から構成された。まず、学習者は各回で意見の対立に対応するために必要な知識と技術を学習していくことになる。学習後は理解度を測るために小テストを受ける。また、学習した知識を技術に汎化するために提示された課題を遂行することになる。課題遂行した内容は、レポートで簡単にまとめて提出する。小テストと課題の内容は、信念対立解明アプローチを理解する医療従事者によって検討され、適宜フィードバックを受けることになる。学習者はそれによって、自身の理解を深

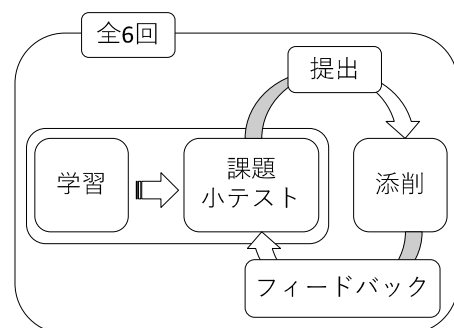


図1 教育プログラムの基本構造

めたり、訂正したりする機会をもつことができる。

また、学習者の主体的学びを促進するために、教育プログラムには、学習者の学びの肯定的側面に焦点化するフィードバックを実施する、毎日の学習を促進する、小テストや課題の未提出者に対するやる気を喚起する機能等を実装させた。さらには、教育者用の学習支援マニュアルを作成し、各回に設定された学習目標を達成するために必要な教育戦略を明記し、可能な限り教育プログラムの質を担保できる仕組みを実装した。例えば、教育者用の学習支援マニュアルにおいて、フィードバックの質を保つために導入、本文、結語から構成されるように構造化した(表)。このような構造化は、全6回すべてに実装した。それによって、教育者の違いによる教育の質に差が生じないように工夫した。

表 学習支援マニュアルに実装したフィードバック構造の一例

構造化	フィードバック例
導入	課題の提出ありがとうございます。意見の対立は日常的に起こりがちですが、体験している当事者にとってはつらいものです。
本文	あなたが体験した出来事を意見の対立という視点でとらえ直すことで、この問題を予防・低減できる対策を考えやすくなります。したがって、今回のように、過去の出来事を意見の対立として捉え直したことは、こうした問題に対する対応力を高めるといった価値をもたらします。
結語	今回の課題は、あなたが体験した意見の対立を明確化することでした。それができるだけ、気持ちの整理ができることがあります。今後も嫌なことがあったら『意見の対立かも』と捉えてみましょう。次回の課題は『ストレスマネジメント』です。効果的に気持ちの整理を行う技術を学びます。引き続きよろしくお願いいたします。

また、教育プログラムに含まれる各回の学習教材の概要は以下の通りとなった。教育プログラム用に作成された学習教材は、学習者の理解を促進し、主体的学びを支援するために、全回でストーリー性のある内容となった。また、教育プログラムは対面学習、オンライン学習、および対面学習とオンライン学習を組み合わせたブレンド型学習のいずれにも対応できる構成になるよう組み立てることができた。

(1) 第1回 意見の対立が生じるメカニズムを理解する(意見の対立の理解編)
多職種連携において、意見の対立が生じる理由を理解することができる構成となった。また、意見の対立が習慣化したり、エスカレートしたりする前に対処の必要性に気づくことができるようにした。なお、本研究で作成された学習教材の一例は、図2に示した通りであった。

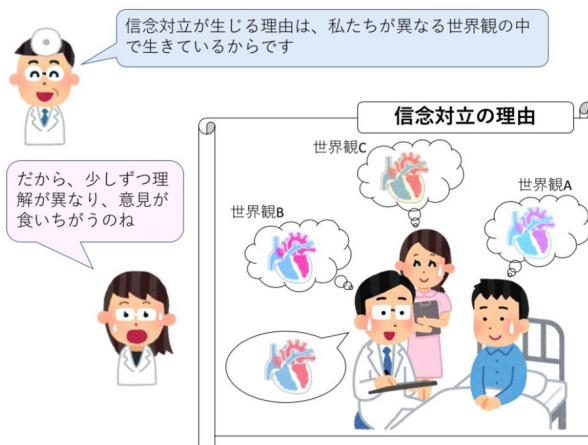


図2 第1回で使用した教材例

(2) 第2回 意見の対立で生じるストレス低減の知識と技術を学ぶ(ストレスマネジメント編)
多職種連携における意見の対立で生じる様々なストレス反応(不安、怒り、抑うつなど)を理解することができるようにした。また、ストレス低減のために使える様々な感情調整技能(運動、マインドフルネスなどのリラクゼーション、ポジティブ反応など)を学習することができる機能を実装した。

(3) 第3回 意見の対立を解き明かす思考法を学ぶ(原理的思考編)
多職種連携における意見の対立で陥りやすい思考パターン(二分法思考や白黒思考など)を理解することができる構成とした。また、意見の対立を克服できる思考(現象学や構造構成主義などの哲学を基盤にした原理的思考)を学習することができる機能を実装した。

(4) 第4回 意見の対立を解き明かすコミュニケーションを学ぶ(多様性理解編)
多職種連携で生じる意見の対立を克服するために、異なる意見をもつ他者への寛容の重要性を理解することができるようにした。また、多様性を尊重するために必要なコミュニケーションスキルを学習することができるようにコミュニケーションパターンの認知を促進する機能を実装した。

(5) 第5回 意見の対立を解き明かすコミュニケーションを学ぶ(情報共有編)
多職種連携で生じる意見の対立を克服するために、多様性の尊重を前提にしたうえで、目的と

状況を共有する重要性を理解することができる構成となった。また、目的と状況を共有するために必要なコミュニケーションスキルを学習するために、コミュニケーションパターンの認知を強化することができるようにした(図3)。

(6)第6回 意見の対立を越えて協働する知識と技術を学ぶ(目標達成編)

意見の対立に耐性のある多職種連携を実現するために、意見の食い違いをマネジメントしながら、多職種連携において設定された共通の目標を達成の重要性を理解することができるようにした。また、共通の目標を達成するために必要な基礎的なスキルを学習することができる構成とした。

モニタリングシート

1日の終わりに、コミュニケーションパターンの実施状況をふり返り、該当するものに○をつけてください

日付	パターン	実施	日付	パターン	実施	日付	パターン	実施
	受動的			受動的			受動的	
	攻撃的			攻撃的			攻撃的	
	作動的			作動的			作動的	
	解明的			解明的			解明的	
	該当なし			該当なし			該当なし	
	受動的			受動的			受動的	
	攻撃的			攻撃的			攻撃的	
	作動的			作動的			作動的	
	解明的			解明的			解明的	
	該当なし			該当なし			該当なし	
	受動的			受動的			受動的	
	攻撃的			攻撃的			攻撃的	
	作動的			作動的			作動的	
	解明的			解明的			解明的	
	該当なし			該当なし			該当なし	

図3 コミュニケーションパターンを学ぶ教材例

教育プログラムは作成過程において試行し、その有用性について質的データと量的データの両側面から検討した。教育プログラムのパイロット実践による前後比較の検討では、臨床実習を終了した49名を対象に質的データをテキストマイニングで分析したところ、単語の出現頻度を見ると、教育前の名詞は多い順に「バイザー」(例：スーパーバイザー、ケースバイザーの二人の指導に相違があって混乱した)、「実習」(例：実習でバイザーの指導にしたがったら、自分の考えがないと否定された)、「意見」(例：意見が言いづらく萎縮した)、「気持ち」(例：涙を見せまいと自分の気持ちを押し殺すのが精一杯だった)、「嫌」(例：一方的に否定され、自分の思いも言えず、何ともつらく嫌な気分になった)などとなった。教育後は多い順に「相手」(例：相手の様子を見ながら機嫌を損ねない程度に伝えられる範囲で事情を伝える)、「意見」(例：目的を明確化し、スタッフにわかりやすいように意見を伝える)、「冷静」(例：感情的にならず冷静に物事を考え対応する)、「コミュニケーション」(例：コミュニケーションの機会を増やす必要がある)、「考え」(例：先生や対象者の考えを教えてもらいつつ、自分の考えもわかりやすく伝える必要がある)などとなった。つまり、これによって、学生は臨床実習で意見の対立を体験するが、うまく対応できずに実習終了後も消化できずにジレンマを感じている、教育プログラムは臨床実習で体験する意見の対立の整理に役立ち、よりよい対策への気づきを促すことが明らかになった。

次に、上記の改良した教育プログラムの有用性について、計52名(教育群26名、対照群26名)を対象に準無作為による群間比較試験で検討したところ、学習者の主観的体験においては、意見の対立を解き明かす重要性、およびそれに必要な知識と技術の獲得の必要性を理解できる学習体験を提供できている可能性が示唆された。また、意見の対立の解消に必要な知識と技術については学習できることが明らかになった。他方、学習者は教育プログラムを通して、意見の対立への対応の仕方について理解することができても、意見の対立が生じる程度については意味のある変化を示さなかった。また、教育プログラムからの脱落率は低く、学習者の関与を促進できる仕組みであることが示唆された。最後に、こうした結果を踏まえた教育プログラムのさらなる改良を行い、ワークシートや動画によって学習を促進する機能等を実装することができた。

このように、教育プログラムには一定の有用性があるものの、今後の課題がいくつか残されていることがわかった。具体的には、教育プログラムのさらなる改善と汎用性の拡張、アクセシビリティの改善、多職種連携教育への一般化、ワークシートや動画による学習促進の有用性、信念対立の改善の促進などがある。今後、より効果的な教育プログラムを開発するためには、さらなる教育実践と研究の積み重ねが必要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古松山建吾, 京極真, 織田靖史	4. 巻 39
2. 論文標題 リハビリテーション専門職の信念対立に対するマインドフルネストレーニングの効果 混合研究法を用いて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 180-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.32178/jotr.39.2_180	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makoto Kyougoku, Mutsumi Teraoka	4. 巻 73
2. 論文標題 Bayesian Analysis of the Relationship Between Belief Conflict and Occupational Dysfunction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 American Journal of Occupational Therapy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5014/ajot.2019.027615	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mutsumi Teraoka, Makoto Kyougoku	4. 巻 64
2. 論文標題 Structural relationships among occupational dysfunction, stress coping, and occupational participation for healthcare workers.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Work	6. 最初と最後の頁 833-841
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3233/WOR-193045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiromi Nakamura-Thomas, Mie Morikawa, Yoko Moriyama, Takeru Shiroiwa, Makoto Kyougoku, Kamilla Razik & Juliette Malley	4. 巻 17
2. 論文標題 Japanese translation and cross-cultural validation of the Adult Social Care Outcomes Toolkit (ASCOT) in Japanese social service users	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Health and Quality of Life Outcomes	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1186/s12955-019-1128-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諸星成美, 京極真	4. 巻 38
2. 論文標題 身体障害を有する地域在住高齢者における作業的挑戦, 作業参加, 作業機能障害, 抑うつ, 健康関連QOLの構造的関連性の検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 294-303
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.32178/jotr.38.3_294	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岸太一, 京極真	4. 巻 6
2. 論文標題 信念対立における要因と反応測定尺度 (ABC-FR: Assessment of Belief Conflict for Factor and Response)の尺度特性の検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本臨床作業療法研究	6. 最初と最後の頁 52-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清家庸佑, 京極真, 寺岡睦	4. 巻 6
2. 論文標題 「作業機能障害の種類に関する スクリーニングツール」と精神障害者の健康状および主観的状态との関連性の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本臨床作業療法研究	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岸太一, 京極真	4. 巻 5
2. 論文標題 医療従事者のための信念対立における要因と反応測定尺度 (ABC-FR : Assessment of Belief Conflict for Factor and Response) の開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本臨床作業療法研究	6. 最初と最後の頁 94-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岸太一,京極真	4. 巻 5
2. 論文標題 医療者の信念対立, 作業機能障害, 職業性ストレスの構造的関連性について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本臨床作業療法研究	6. 最初と最後の頁 80-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古松山建吾,京極真	4. 巻 37
2. 論文標題 理論に根ざした実践で生じる信念対立と自己受容性との関連性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 301-309
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 京極真	4. 巻 3
2. 論文標題 ポリファーマシーの信念対立を克服するために: 信念対立解明アプローチの立場から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 在宅新療	6. 最初と最後の頁 1161-1165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古松山建吾, 京極真	4. 巻 36
2. 論文標題 専門職のための信念対立評価尺度(Assessment of Belief Conflict for Profession:ABCP)の開発: 作業療法士を対象にして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 470-482
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 京極真	4. 巻 11
2. 論文標題 強いチームをつくる! 信念対立解明アプローチが、いま医療で注目される理由	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nursing business	6. 最初と最後の頁 443-451
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 多田哲也, 京極真, 山内大輔	4. 巻 4
2. 論文標題 ハンドセラピィを受ける患者が体験する信念対立	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本臨床作業療法研究	6. 最初と最後の頁 62-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 京極真	4. 巻 26
2. 論文標題 介護福祉士との信念対立	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 主任看護師	6. 最初と最後の頁 104-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 京極真	4. 巻 36
2. 論文標題 意思決定における信念対立	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Modern Physician	6. 最初と最後の頁 415-417
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 京極真
2. 発表標題 リハビリテーション連携のための信念対立解明アプローチ
3. 学会等名 Japanese Journal of Rehabilitation Medicine (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村裕美, 京極真
2. 発表標題 地域在住高齢者がいadak物理的家屋環境に関するリスク認識と解消法
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野口卓也, 京極真
2. 発表標題 ポジティブ作業に根ざした実践(POBP)における介入効果の要因の検討
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 椿原一郎, 狩長弘親, 岩田美幸, 京極真, 竹林崇
2. 発表標題 作業療法学生の自己調整学習を促すプログラムの開発に関する予備的研究
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚田遼, 京極真
2. 発表標題 脳卒中者の日常生活における麻痺手の使用、不使用に関する主観的条件の探索的検討
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山下高介, 京極真
2. 発表標題 精神科作業療法における作業に根ざした実践の介入戦略の質的解明
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諸星成美, 京極真
2. 発表標題 身体障害を有する地域在住高齢者の作業的挑戦の潜在クラス分析と各クラスに関連する要因の検討
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清家庸佑, 京極真, 寺岡睦
2. 発表標題 作業機能障害の種類に関するスクリーニングツールと主観的尺度の関連性の検討
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 京極真, 寺岡睦
2. 発表標題 作業に根ざした実践2.0 作業療法の専門性を発揮し、多職種連携を促す新たな理論
3. 学会等名 新潟県作業療法学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 京極真, 寺岡睦
2. 発表標題 信念対立解明アプローチ 多職種での意見の対立を解明し、効果的な連携を目指す
3. 学会等名 新潟県作業療法学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大岸太一, 京極真
2. 発表標題 信念対立解明スキル向上を目的とした学習プログラムの効果の探索的検討
3. 学会等名 岡山県作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 京極真, 寺岡睦
2. 発表標題 信念対立解明アプローチに根ざした解明技能評価の開発
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺岡睦, 京極真
2. 発表標題 一般版信念対立評価の開発
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古松山建吾, 京極真
2. 発表標題 理論に根ざした実践で生じる信念対立と自己受容性との関連性
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大岸太一, 西濱美絵, 有元克彦, 京極真
2. 発表標題 透析医療に携わる医療従事者の職業性ストレス要因, 反応, 修飾要因の構造的関連性の解明
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古松山建吾, 京極真
2. 発表標題 作業療法士の自己受容性と信念対立の構造的関連性
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 京極真, 松田憲幸, 瀬田和久, 池田満
2. 発表標題 信念対立説明ツールが思考過程に与える影響に関する予備研究
3. 学会等名 第50回日本作業療法学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大石 醒悟, 柴田龍宏, 高田弥寿子・編集, 京極真・分担執筆	4. 発行年 2018年
2. 出版社 南山堂	5. 総ページ数 161
3. 書名 実践から織る！心不全緩和ケアチームの作り方	

1. 著者名 青島周一・編著, 京極真・分担執筆	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中外医学社	5. 総ページ数 322
3. 書名 こうすればうまくいく！薬剤師による処方提案	

1. 著者名 澤田辰徳, 京極真, 寺岡睦, 田村浩介, 三崎一彦, 齋藤佑樹, 上江洲聖, 友利幸之介, 小川真寛, 福留大輔, 金城正太, 鈴木達也, 仲地宗幸, 建木健, 上城憲司, 小林隆司, 大野勘太, 竹林崇, 藪脇健司, 柴田八衣子, 石黒望	4. 発行年 2016年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 198 (24-25)
3. 書名 作業で結ぶマネジメント	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----